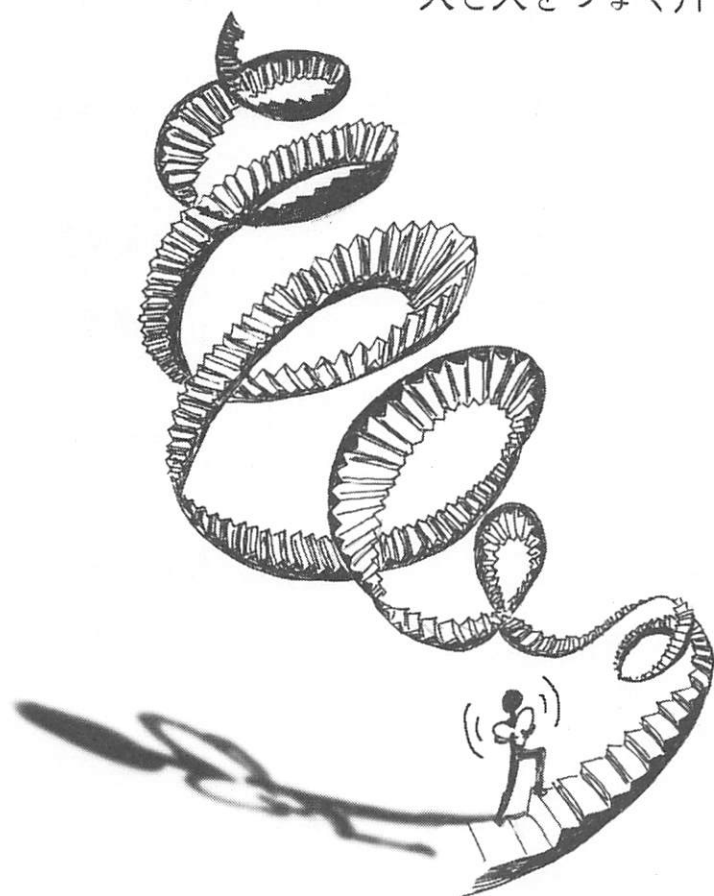


平成18年  
7月号

250円

# やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



ツナコーンコロツケ

フトウツワ(騎士道精神)

大気圏の旅

旅の荷物=この世の荷物

『八十日間世界一周』

旅のお守り~言葉の持つ力~

カゴ

「唯 行かんが為に行かんとするものこそ、真個の旅人なれ。  
心は気球の如くに軽く、身は悪運の手より逃れ得ず、如何なる故とも知らずして  
常に唯、行かん哉、行かん哉」と叫ぶ」p.21



人と人をつなぐ月刊総合誌「やすらぎ」もこの7月号をもって創刊から丸4年が経ったこととなります。四年制の大学だったら学部に入學してから卒業するまでにかかる年月。一人の人間が多様なことを学んで大きな成長を遂げてもおかしくない、ある程度まとまった年月が経ったこととなります。

そのような年月を自分自身がいかに過ごしてきたかを振り返ったとき、子供の頃に熟中した「人生ゲーム」を思い出しました。ルーレットを回し、駒を動かしながら人生の様々な節目を経験していくお馴染みのボードゲームです。自分自身の人生があのボード上に描かれていて、それを取り囲むように上から見下ろしているような錯覚を覚えました。「私」という駒は今、ボードのどの辺りを通過中なのだろうか、ゴールでは何が待っているのだろうか・・・。

人生ゲームでは確か人間を表す棒を車に挿して駒として移動させていましたが、人生は時間と空間を使って止まることなく続けられる「旅」なんだと端的に実感させられます。またゲームの中で繰り広げられる損や儲け、結婚などの展開は、現実世界では人生の成功を左右する重大事のように思えますが、少し客観的に見ると人生という道を旅する途中で遭遇する出会いやアクシデントの数々というだけであって、旅そのものの価値を無に帰するものではないと考えられます。旅にトラブルはつきものと言いますが人生という旅でも同じことです。大局的見地に立つと、起こってしまう出来事が良いとか悪いというのではなく、大切なのは対処の仕方、旅人の生き方そのものではないでしょうか。そして最後に考えなければならぬこと、それはどの旅にも目的や終わりがあるように、人生という旅にも目的と終わりがあるはずだということです。人生ゲームの目的は大金持ちになっていると早くゴールすることでしたが私たちの人生はどうでしょう。今月のテーマは「旅」です。



編集部より	2
揺れ動くこと、揺るがずにいること	3
祈りのある毎日へ	5
ツナコーンコロッケ	5
フトウツワ（騎士道精神）	6
預言者ムハンマドが教えた予防医学	8
行くのが許された旅	10
年老いた人々へのメッセージ	11
大気圏の旅	14
旅の荷物＝この世の荷物	20
『八十日間世界一周』	21
旅のお守り～言葉の持つ力～	23
カゴ	25
4周年の節目に～	26





真実を見出し、心からそれに結びつくことが重要であるように、それを見出した後、それに対し忠実であること、その道を進むことにおいて揺るぎのなさを示すこともまた、重要であり、繊細な注意を払う価値のあるポイントである。真実の輝きに到達した人が簡単に道を変えることはありえないだろう。朝に晩に何度も向かう方向性を変えている人は、真実を見出せていない、ある意味で不幸な人、もしくはその価値を把握できていない、理解力に欠けた人といえよう。

その心を、真実の大海の岸辺とした幸福な人々は、尽きることのない希望や熱意と共に、その大海から打ち寄せられる波を抱きとめる。「もっと、あるだろうか。」という。彼らは『探求』を終え、向かうべき方向を見出し、その魂に揺るぎなくそれを据えた人々である。常に波のように行き来する人々は、探し方を知らない不慣れな人々、もしくは『探求』と『見出すこと』を混同している判断力のない人々である。探し求めた人だけが、見つけることができる。見つけることができた人は、そこで安定している。見つけたと思いついでいるだけの人は、人生を通してずっと同じ場所を回り続けているだろう。

揺るぎなくその位置を守ることは、敵に勝ち、目標を達成する為の第一の要素である。戦線を放棄して立去る人は、持ち場を離れた瞬間から、喪失への道を歩み始める。

前線からの逃亡者は、まず自分の良心、そして歴史、未来の子孫たちに対して罪を犯したことになり、従ってその意図に反し、一撃を被る結果となる。あらゆる崇高な宣教において、自らの居場所を固辞し続け、前線を守ることは、勇敢さのしるしである。風向きによって揺れ動き、自我を抑制できないしもべは理解しなかったとしても、あるいは理解することを望まなかったとしても、真の人間である人ならば、真実をひとたび理解した以上は、目先の利益は彼を拘束せず、畏れは彼をとどまらせず、性欲が彼を妨げることもない。彼は空を飛ぶように、これら全てを飛び越えて進み続ける。

これらの奉仕において、常に考えや方針を変え続ける人たちは、自分たちに対する信頼を損なってきたのと同様に、宣教の道を行く友たちにとっても、希望を砕く存在であり続けてきた。熱い思いで歩き続ける集団の中から1人が脱落し、離れていってしまう事は、一体化していた行動のリズムを乱し、混乱をもたらす。お互いとしっかり

結びついていた理想のコードのうちいくつかが外れてしまうことは、友に衝撃や悲観、失望を与え、敵には喜びを与える。

しばしば約束をたがえ、心を決めずにいる人は、いつか、自分自身への信頼をも失い、少しずつ他人の影響を受けるようになる。時と共に個性を完全に失い、身動きできない状態に陥ったこれらの魂は、自らにとっても、そして集団全体にとっても害を与える要素となってしまう。

こんにち、目先の計算にとらわれてしまった人たち、地位、名声、欲といったものにこだわってしまった人たちは、目先の利益が虹のように私たちの視野を覆い、恐れや疑念が私たちの意志に投げ縄を投げかけるような時代には、一体どうなってしまうだろうか。

人間の歴史は、城や町が何千もの兵士たちの血と汗にまみれた奮闘によって獲得され、また多くの場合、1人の裏切り者、1人の卑怯者の裏切り行為によってそれが永遠に失われたという出来事で満たされている。そういった出来事は、1つの民族の上に起こったものだけを取り上げても、辞典に収まりきらないほど多数である。

人をあやめしてしまう名声、信仰心の欠如した欲望、卑怯な食欲さよ！…どれほどの魂が、あなた方に一度近づいただけで青ざめ、しおれてしまったことか。どれほどの心が、あなた方の冷たい秋の気候に、葉を落として散っていったことか。どれほどの有能な人たちが、あなた方の陽気な高笑いのせいで礼拝所から立去り、酒場へと向かってしまったことか。そう、あなた方の空気に触れてしまった若者たちは、精気を失い、だらしない状態になってしまった。若者たちはあなた方のもとで、老人のようになってしまうのだ！…<sup>\*</sup>



---

\* この文章が“Pearls of Wisdom”よりの訳です。



- 救いのない者達を救い給うお方よ  
支援者のない者達を支援し給うお方よ  
励ます者のない者達を励まし給うお方よ  
守護する者のない者達を守り給うお方よ  
逃げ隠れる場のない者達を避難させ給うお方よ  
誇りを失った者達に誇りを与え給うお方よ  
力弱き者達を強くし給うお方よ  
助ける者のない者達を助け給うお方よ  
友なきものに親しくし給うお方よ  
富まぬ者達を十分に満たし給うお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。  
私達を地獄の炎からお助け下さい。

レシピコーナー



ツナコーンコロッケ

- 材料： ジャガイモ 3個ぐらい                      ツナ缶 1缶  
          コーン缶 1/2カップ                        塩 少々  
          コショウ 少々                                小麦粉 適量  
          卵 適量    パン粉 適量    揚げ油 適量

- 作り方： 1. ジャガイモをやわらかくなるまで茹でる。  
2. ジャガイモの皮をむき、ボールにジャガイモを入れつぶす。そこにツナ、コーン、塩、コショウを加えよくかき混ぜる。適当な大きさに丸める。  
3. 丸めたら、小麦粉 卵 パン粉の順番で衣をつけ、170℃ぐらいの温度であける。キツネ色になったら出来上がり。

\*偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願(きがん)、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



## フトウツワ(騎士道精神)\*

騎士道精神と定義されるフトウツワは、寛容、寛大、慎み深さ、貞節、信頼、誠実、慈悲深さ、知識、謙虚、敬虔さなどという様々な美德の合わさったものと言えるでしょう。これは信仰の深い人の持つ性質であると同時に、アッラーへの道における状態の一つであり、生来の性質とは別に、利他精神や他人を助けることを自分の性質とした人を意味します。これは善行の重要で不可欠な側面であり、人間らしさの重要な側面でもあります。

ファタ(若者)という言葉から派生して、フトウツワは、すべての悪に対して反抗することや、アッラーの誠実なしもべであるために努力することの象徴となっています。

『われはかれらの物語の真実をあなたに語ろう。かれらは主を信じる青年であったから、われはなお一層かれらを導いた。われはかれらの心を引き立て、かれらは起き上がった時言った。「わたしたちの主は、天と地の主である。わたしたちは、かれを差し置いて如何なる神にも祈らない。(もしそうしたら)本当に無法なことを口にするにもなる。」(聖クルアーン 洞窟章 18:13-14)』この節はそれをよく表しているでしょう。

『(或る者が)言った。「わたしたちは、イブラーヒームという若者が、その方々を批判するのを聞いた。」(預言者章 21:60)』これは人類を真実へと導こうとした人が、フトウツワを完璧に身に付けて、社会の中でどのような地位や影響を持っているかを表しているでしょう。それとは対照的に、『その時2人の若者が、かれと共に下獄した。(ユースフ章 12:36)』や『それからかれ(ユースフ)は、その部下に(命じて)言った。「かれらの(穀物と交換して払った)代価をかれらの袋に入れて置け。」(ユースフ章 12:62)』で言及されている若者たちは、騎士道精神を持たない普通の若者なのです。

「幸福の時代(預言者様のいらっしゃった時代)」から今まで、多くの人がフトウツワについて書き記し話してきた中で、その概念は様々な定義されてきました。貧しい人々を軽蔑せず、裕福な人々に感わされないこと。誰からも公平に扱われることを期待せずに、現世的自我に負けることなく人生を生きること。常に他人に対して思いやりを持ち、他人のために生きること。全能の神アッラーにすべてを捧げるために、偶像や崇拜されるものすべてを粉碎し、偽りに対して抵抗すること。自分が受けた悪行に耐え、アッラーを正しく評価していない場面では激しく非難すること。自分が犯してしまったことに対しては、小さな罪でも一生自責の念を持ち続けるが、他人の罪はどんなに大きいものでも見逃すこと。自分は小さく卑しいしもべだが、他人は敬虔だと考えること。自分を怒らせる人々との関係を持ち続けながらも、他人に対して腹を立てないこと。自分を傷つけた人に対して親切であること。他の誰よりもアッラーと他の人々に対して尽くすが、自分よりも他人に対して報奨が与えられるように願うこと。

\* この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

フトウフは、第四代目カリフであり預言者(平安と祝福あれ)の従兄弟のアリーの述べた四つの美德に、まとめられることもあります。それは、誰かを罰することができるときに許すこと、非常に怒っている時に温和さを保ち、穏やかに寛大に振舞うこと、敵に対して幸運を祈り、良い態度で接すること、自分が困っているときでも、他人の健康と幸福を最初に祈ることです。

アリーはフトウフを最もよく現す人でしょう。モスクで朝の礼拝を先導している間にイブン・ムルジャムに刺されたときに、彼の子どもたちは父親が死にそうなのを見て、イブン・ムルジャムに対してどうして欲しいか尋ねましたが、彼は報復の実行を指示しませんでした。また、ある戦争の最中、アリーは掴んでいた敵を放しました。その理由は、アリーがこの男を殺そうとしたとき、彼がアリーの顔にツバを吐いたことに彼が腹を立てたからでした。怒ったために、この男を殺す動機が純粋なものでなくなってしまったかもしれないと恐れ、アリーは彼を放したのです。指導的な教友であり彼の頑強な敵であったズバイル・イブン・アウワムが殺された時には、彼は心から悲しみました。彼はいつでも他人を一番に考え、自分が困っているときでさえそうだったので、冬でも常に夏服を着て寒さに震えていました。彼について言われていたことに、アリーのように若く騎士道的な男は存在せず、ドウ・アル＝フィカル(アリーの剣)のような剣は存在しないというのがありました。アリーは預言者(平安と祝福あれ)と共に住み、彼に育てられました。彼は何の汚点もない完璧に純粋で正直な生活を送り、預言者ムーサー(平安あれ)のフトウフに関する質問にアッラーが答えられたことを具体化していました。「それはあなたが私から持っていったときのように、自分自身を純粋で汚れのない状態で私に返すことができることを意味する。」

人間は皆アッラーの単一性とイスラームを受け入れる潜在能力を持って創造されていますが、ファタ(騎士道精神を持つ若者)の徴は、アッラーの単一性を完全に確信すること、その確信の示す通りに生きようとする、現世的肉体的欲求によって魅惑されずに、純粋で精神的な人生を送ること、行為、思考、感情において常にアッラーのご満悦を求めることです。自分の現世的側面、シャイターン、食欲、現世への愛、執着から離れられない者は、フトウフの頂上へと登ることはできません。

フトウフはすべての「世界最高峰の山々」を越えてさらに高く登ることで得られる宝物です。

平坦な道のりでも疲れてしまう人々が、どうやったらそのような宝物に手が届くのでしょうか？





## 預言者ムハンマドが教えた予防医学\*

### 5. 口腔内と歯の清潔さ

六つのハディースの本がそろって伝承し、また40人近い教友たちのサインが記され、その意味でも信頼のおけるあるハディースで、預言者は次のように述べておられる。「もし、私のウンマに困難さをもたらす心配がなかったら、礼拝のための小浄のたびごとに、ミスワク（歯を磨くために使われる、木の根で作られた小さい棒状の物）を使うことを命じていただろう」<sup>†</sup>

ウンマに困難さを与える可能性があるために、このような命令は出されなかったのである。そうでなければ、ミスワクを使うことも、礼拝と同じようにファルド（義務）とされただろう。これは、この教えの、容易さという基本に反するものになり得た。なぜなら、誰もが、いつでもどこでもミスワクを手に入れることができるわけではないからである。

ミスワクを使うことはファルドではない。しかし、重要なスンナ（預言者の慣行）である。このことに関しては、昔からいくつもの書物が書かれてきた。最近の研究者は、ミスワクについて科学的な観点から研究している。将来、インシャラー、それらについても読まれることであろう。

歯を清潔に保つことは、ミスワクによつてのみ可能というわけではない。指、塩、歯磨き粉、それ以外のものでも行なう事はできよう。それぞれが好む方法で歯を清潔に保てばよく、これに関しては何も言うこともない。ただ、ミスワクにも、特殊性があることを見逃すことはできないのである。

今、ここで考えてみてほしい。一つの教えの伝道者（教えを作ったという意味ではない。なぜならそれを作られたのはアッラーである。預言者ムハンマドはそれを伝えられたのである）が、日に5回、10回とミスワクを使うことを、しかもスンナとしてそれを命じられたのである。つまり、この教えは、今日の歯の清潔に保つこと、虫歯予防といった理解よりもさらに進んだものなのだ。一般の者は言うまでもなく、歯科医でさえ、日に5回も10回も歯を磨くとは思えない。しかし預言者ムハンマドは少なくともそれだけの回数歯を清められたのである。夜中に何度か起き、礼拝をされる。そのたびにミスワクを使われる<sup>‡</sup>。朝の礼拝、イシュラクやクシュルクの礼拝、昼、午後、夜、夜中の礼拝、それから何か食べたり飲んだりしたあとにも必ずミスワクを使われるのである。これらを全て数えれば、おそらくは5回や10回ではな

\* この文章は“Prophet Muhammad: Aspects of His Life・1”よりの訳です。

<sup>†</sup> Bukhari, Jumu'ah 8; Muslim, Taharah 42; Abu Dawud, Taharah 25; Tirmidhi, Taharah 18; Nasa'i, Taharah 6; Ibn Maja, Taharah 7; Ibn Hanbal, Musnad 1/80

<sup>‡</sup> Bukhari, Wudu" 73; Muslim, Taharah 46, 47



くそれ以上の回数で預言者ムハンマドがミスワクを使われ、歯をきれいにされたことを知ることができるであろう。

## 6. 食事において節度を保つこと

予防医学において、預言者ムハンマドはまたこのように述べておられる。「食事をとる時は、胃の3分の1を食べ物に、3分の1を水分に、3分の1は空にしておきなさい。アッラーが最も嫌われるのは、満たされた胃である」<sup>\*</sup>

このハディースを補佐する関係にあるさらに別のハディースがある。「私のウンマに関して、私が最も恐れていることは、肥満腹になること、たくさん眠ること、怠けること、そしてはっきりした考えの欠如である」<sup>†</sup>

ハディースで説明されていることは、結果として同じ点でまとめられる。節度なく、計算もなく、ぼんやりと人生を過ごし、寝てばかりいる人間が太って肉をつけることは避けられないことである。人間は太るに従ってさらに大食いになり、食べることによってのんきさを身につける。あるいは、次のように言うこともできる。大食いの人は、当然たくさん眠ることになる。たくさん眠る人は、はっきりした考えを持たなくなるであろう。どれをとっても、預言者ムハンマドが恐れられた事態である。

これ以上は、医学の世界の、科学的な報告に譲る。あなた方はそれらを読んだ後、預言者ムハンマドが何世紀も前に語られたことと同じであること、その言葉には少しも偽りのないことの、証人となられるであろう。



---

<sup>\*</sup> Tirmidhi, Zuhd 47; Ibn Hanbal, Musnad 4/132

<sup>†</sup> Hindi, Kanz al'Ummal 3/460



私は自我の強い人で、いろいろな事を自分で乗り越えていると簡単に思ってしまうタイプです。どれほど読んで、頭で分かっている、でもまだ実感していないのは、どの事でも、何でもアッラーの許しがあり、初めて人間に出来るということです。

私にとって、ずっとずっと行きたい旅がありました。何年も考えて、行きたくて、でもずっと行くことの出来ない旅。

行くのが義務であり、行かないといけないのに、なぜか行かなかった旅。

元気だったし、お金もあったし、時間もあった、でも行けませんでした。

やっと何年間を後にしたところで初めて、私の旅が行けることとなりました。その旅先が預言者様在实际に足で踏み歩いていた土地でした。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代までに預言者たちが皆行けた旅の土地。

アッラーにもっとも愛された方々が歩いていた土を踏むのに待っていた何年間。

何が足りなかったか、何をすべきだったか、やっと旅にでる事が出来たけど、本当の意味でこの旅を私は理解出来たか今でも分かりません。

ですが、私は生きている間ずっと行きたかった旅にでる事が出来ました。私はハッジ（巡礼）に行きました。

皆様にそれぞれの旅の予定があるとも思いますが、私はハッジの旅で改めて実感していたのは、「行くのが許された旅」以外に人はどこにも行けません。

そのことから得られたもう一つは、我々は元気でいられて、生きている間にあるどの出会いの場でも、どの旅でも許されたからその場にいるし、その行動が出来たことの意味を理解し、感謝できる人間でいないといけません。

私には後一つの旅の夢だけ残りました。

死を迎えて、アッラーの元に行ける旅です…

アッラーの前で「やっと来れました、私にあなたをチャンスをお与えくださったことに感謝します」と言える旅の夢…

その旅も信仰共に行くことが許されることを願うばかりです。



## 年老いた人々へのメッセージ

### 三番目の望み

若さの眠りから覚め、老いの朝に目覚めた時、私自身を眺めた。私の体は墓への下り坂を転げおちていくようだった。ニヤーズィミスリーが

「人生と言う館から一つつつ石が地面に落ちた。

命は気を止めずに横たわり、館はしらぬまに崩れ落ちた。」

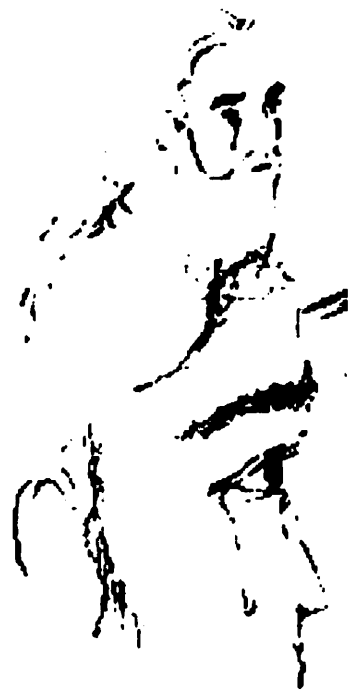
と綴ったように、魂の館である肉体は日ごとに、石が落ちるように、衰えていく。そしてこの世と私を強くつなぐ希望と熱望は絶ちきれ、無二の親友たちや私の愛する者達との別れの時が近づいたのを私は感じた。その霊的な深遠な効く薬を持たないと思えた傷に効く薬を探しつづけたが見出せなかった。私もまた、ニヤーズィーのように呟いた。

「私の心が力を振り絞って、不老不死を望んだとしても、アッラーの英知は私の肉体が衰えることを必要とする。ルクマーンさえも解決を見出せなかった効く薬のない苦しみへ陥ってしまった。」と。

と、その瞬間、アッラーの恵み多きお言葉を語られる方、模範者、象徴者、宣言者、代理者であられる誉れ高き預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の光と彼のとりなしとそして人間に対する真理への導きが、治す薬もなしに際限なく続くと思われた傷に良く効く軟膏、特効薬となった。まさに暗黒の絶望を光り輝く希望へと変えた。

さあ、私のように老いを感じるご老人達、ご老婦達よ、

私達は死に逝き、ごまかしはなんの役にも立たない。私達の目を閉じたとしても、私達はここに留まることなくいつかは(あの世へ)送られる。が、気に留めないため、また一部の者にとっては正しい道からの逸脱に対する不安な強迫観念のため、私達に対して別離と暗闇にしか見えない墓の中の(死から審判の日まで)生活は、実は知人、友人たちの集まりの場である。私達をとりなしてくださるアッラーが最も愛された御方、預言者ムハンマドを始めにして、すべての友人知人に出会える世界である。さよう、1350年もの間、毎年、35000万人もの人々の長であられ、彼らの魂を育み、英知を教えてください、心に愛をお伝えになる御方、毎日、アッサバブ



カルファーイル(ある事の原因となりそれを成す者として)秘められた英知により、ウンマ(共同体)すべてがなす善行と同等の善が(天使によって記帳される)善の記帳簿の頁に書き加えられる御方、そしてアッラーがこの世界を創造なされた目的の理由であられ、創造物の価値を高められる原因となる御方であられる讃えられるべき預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)は、この世に生を受けた瞬間、信頼おける伝承と秘められた英知により「わがウンマよ、我がウンマよ。」とおっしゃられたのと同様に、人々がマフシャルで「我が魂よ、我が魂よ。」と音を発する時、ふたたび「我がウンマよ、我がウンマよ」おっしゃりながら、最も神聖で、崇高な犠牲心と共に、再度、私達のとりなすため、私達のウンマの救済に急がれる御方、その方が逝かれた世界へ私達も向かっている。その太陽のに周りで多くのアスフィヤー(篤信で預言者(彼の上に平安あれ)の道に従う神の友)やアウリヤー(神の友)達が諸星として輝きわたる世界へと私達は向かっているのである。その御方のとりなしの下に入り、彼の光から益を得、そして真っ暗な墓の世界から救われる方法は、まさしく、預言者(彼の上に平安あれ)のスナナに従うことである。

#### 四番目の望み

老いに足を踏み入れた時、今まで気にとめずにいた身体が健康が損なわれているのに気づいた。老いと病いが同時に私を襲った。何度も何度も襲ってくるので、夜も私は眠れぬほどだった。子ども達は財産と言うよなこの世に私をつなぎとめるものも何もなかった。ぼんやりしているうちに若さを失い、人生という資本の果実を、犯した罪やあやまちすべてを私は悟った。ニヤージー、ミスリーのように叫びながら、

「私はなにも商売をせず、人生と言う資本を無駄にしてしまった。

もとの道に戻ったが、知らないうちに隊商はどこかへ移動していた。

嘆き、うめきながら静かに独りそこから、私は出発した。

悲しみに潤む目、心は燃えあがり、驚きおののく。」と言葉を發した。

その時、私は異郷の地にあった。望み泣く悲嘆にくれ、後悔から嫌悪感がうまれ、援助者にふさわしい懐かしさを感じた。

すると、その時、クルアーン イ ムウジズル ベヤーン(神意を伝える奇跡のクルアーン)が私に救いの手を差し伸べた。私にどれほど力強い希望の扉を開いただろう、どれほど真の慰安の光が与えられたらどうか、その状況下で100以上の絶望さえも取り除く事ができ、その暗黒を一掃できるほどのものであった。

さて、私のようにこの世との関係が絶たれはじめ、この世に結びつく糸が切れ始めた親愛なるご老人、御老婦たちよ、

彼の支配の下に、この世界を完璧なすばらしいひとつの街、ひとつの宮殿を造られた永遠に偉大なお方が、その町、その宮殿に住む最重要なお客人や友人達と共に語らず、会うこともしないなどということが起こり得るだろうか?もともとすべてをご存知の上で、この宮殿を御造りになられたし、そのご意志

とご選択によりそれを整え、飾り付けられた。さよう、やはり、造る者がよく知る、そして、よく知るものが語るのである。この宮殿や街を私達にすばらしい客間としてまた商談の場としてお与えになったのだから、私達に関連すること、私達の望みを示す一冊の筆記帳や本も見い出せるであろう。

まさにその聖なる本の中での最も完全なものは、多くの奇跡を示し、毎分少なくとも100万の人の口々で読まれ、光を放ち、一文字につき少なくとも10の報奨と10の善行を、ある場合は1万もの、さらにみいつの夜には3万もの善行をお与えになり、さらに、天国の果実と墓の中の光をおあたえになるクルアーン イムウジズル ベヤーンである。この段階でその競争相手になる本は宇宙のどこにも存在しないし、誰も示す事はできないので、私達の手の中にあるこのクルアーンは、天と地のすべての美の創造者であられる万物の主による、創造者の偉大さと主のめぐみの広大さに基づく御言葉であり、ご命令であり、めぐみの源泉である。それ（クルアーン）にしっかりと結びつくように、すべての苦痛への癒し、暗黒に対する光明、絶望に対する希望がその中に秘められている。

まさに、この永遠の宝物の鍵とはイーマーンであり、(アッラーへ)服し、クルアーンを傾聴し、受け入れ、読むことである。





私たちがすっかり慣れてしまっている日常的な出来事は、私たちの注意や関心をほとんど引かない。例えば、昼の後には夜が来る。春の後には夏が来る。水は流れ、風が吹き、雨が降る。

私たちは、それらの本当の意味を隠している覆いに気づかず、これらを当然のことと見なす。私たちが絶え間なく吸っている、空気のことを考えてみよう。私たちは大気の中で起こっている事柄を見ることができないが、科学的、知識的なゴーグルを身に付け、良心というフィルターをかけるならば、それらの物事が見えてくるだろう。

一見、空気は、原子、イオン、そして微粒子からなるシンプルなガス状の混合物のように見える。78, 1パーセントの窒素、20, 8パーセントの酸素、そして二酸化炭素、水素、アルゴン、ネオン、クリプトンなども微量に含む。ちょうど料理のための塩とスパイスのようである。誰もこの料理を嫌う者はいない。その神秘、秘められた事実は、調査によって明らかになってきている。

## 光源としての空気

空気は私たちの周囲を照らす鏡である。私たちは宇宙で本や雑誌を読むことはできない。そこには照明が全くない。宇宙は真空である。太陽の光と熱を反射することのできる一切の分子や原子はそこに含まれず、その暗闇は照らされることがない。月には、太陽の光線を反射する大気、あるいは何らかの気体の層が存在せず、表面は明るくても、そのすぐ上の層は暗闇である。太陽と、目の創造主は、私たちが自由に見ることができるよう、空気中で原子や分子を創造され、それらを配置されたのだ。

次に、私たちが生きるうえで依存している空気を分析してみよう。私たちは呼吸のたびに酸素を取り入れている。それは私たちの体の中で食物を燃焼させ、それによって全ての器官にエネルギーを供給する。そして体熱を維持する。それは喉、口腔、歯を通し、言葉という形で外に出される。

空気において最も多く含まれる成分、窒素は、酸素濃度を薄め、私たちがより快適な状態で呼吸できる空気を作る。そうされなかった場合には、酸素は私たちの肺にとって危険な存在であったであろう。窒素はまた、一つの天然肥料でもある。それは土によって吸収され、土の中で様々な微生物に与えられ、そして植物に吸収される。結果、我々の基本的な栄養源構成要素のうちの1つが生産されるのだ。それがたんぱく質である。植物から動物へ、そして人間へといたるこの栄養の流れは、相互援助と協力体制の魅力的な例である。

二酸化炭素は、空気中に微量（0.03 パーセント）しか存在しない。そしてこれまで毎年、植物の助けと共に、光合成として知られるプロセスで、何十億ものブドウ糖を合成するのに使われてきた。植物の葉は二酸化炭素を吸収し、根は水分を吸収する。それに日光が加えられると、主産物としてブドウ糖が完成する。これはあらゆる器官にとって必要な栄養分である。酸素はこの過程における副産物である。ブドウ糖の燃焼によって生じるエネルギーは、全ての細胞を機能しうるものとする。

光合成はブドウ糖における炭素原子間の結合エネルギーとして、太陽からのエネルギーを保存する。したがって、クルアーンの指摘のとおり、太陽は私たちの食物源である。

「もしあなたが、かれらに『誰が天から雨を降らせ、それで、死んでいる大地を甦らせるのか。』と、問うならば、かれらはきっと『アッラー。』と言うであろう。言え、『アッラーを讃えます。』だがかれらの多くは理解しない。（蜘蛛章第 63 節）

この神聖な源をよりよく知る為、大気圏を移動していってみよう。私たちは今、地表から 10 キロ上の地点にいる。ここでは呼吸をすることができないので、酸素タンクを使用しなければならない。13 キロ上空では、目や血管が破裂するような圧力を感じ始める。

### 感じられない荷重

空気を形成する気体は、私たちの皮膚に 1 センチ当たり 1 キログラムの圧力を加える。気圧の変化は、気象学的に大きな役割を果たす。大嵐やハリケーンは、気圧が 1 パーセント変化することで起こるものである。全ての生命体が、この圧力の中で快適に、そしてその圧力を意識することなく生きる。

私たちがさらに上昇していくに従って、気体の密度と気圧は減少していく。また私たちの体液の圧力が増し（私たちの体の 70 パーセントは水である）、蒸発してしまうか、あるいは私たちの体から飛び散ってってしまうのではないか、と思えるほどになる。空気は、私たちが考えるとは逆に、非常に重いものである。指先ほどの面積に、1 キロもの圧力がかかっていることを、私たちの多くは知らない。私たちの体に 15 トンに値する圧力がかかっていることも、私たちは知らない。なぜなら創造者が、その



のバランスを保たれているからである。このバランスが崩れることは、人の命を脅かすものとなる。人々が高いところで生きていけないこと、登山家が頭痛や鼻血を経験すること、宇宙飛行士が加圧された宇宙服を着ること、これらの理由がこれなのだ。

## 大気の層

科学者は、大気をいくつかの層に分ける。それぞれ、その熱、気圧、湿度、そしてその中で起こる出来事において独自の特性を持つ。最初の層は、対流圏である。これは海面から16キロ上空に位置する。この層は、空気や物質の完全な対流がその特徴であり、ここでは雨、雪、風のような気象現象が見られる。対流圏の最上層では、温度はマイナス56度になる。

しかし宇宙の主は、その特有のやり方で、巨大な水の分配センターとして大気を働かせる。弱い風は、雲という形で何トンもの水を循環させ、それを必要とする土に、水をもたらす。空気の循環は完全なかたちで調節されており、どのような領域であれ、いつでもぬらされていたり、いつでも乾いていたたりすることはない。砂漠や熱帯雨林ですら、それらが必要なものを受け取っているのだ。

地軸にはおよそ23度の傾きがあり、北にある国々は南にある国々よりもより少ないエネルギーを受け取る。その結果としてエネルギーレベルの不一致が生じると見られるが、実際には、より寒い領域への熱気の効率的な流れが存在するため、それぞれの領域はエネルギー需要を満たす。上昇する際、熱い空気は低気圧を形成し、冷気は降下する際に高気圧を形成する。これら全てによって、赤道の熱をエネルギーとして、惑星全体に水や空気を広めるのを助ける。生命を与えられる創造主によってプログラムされたヒート・マシンによって。

100メートル上昇するごとに、気温は0.61度低下する。上昇気流が対流圏（大気圏におけるキッチンのような）に入ると、蒸気は細かい水滴に凝縮される。そして、神の慈悲のサインである雲が形成され始める。雲の中の細かい水滴は、氷の結晶に形を変え、気温が0度を下回ると、まるで大規模な軍隊のように、地上に降ってくる雪となる。

これらが行なわれている間、私たちの肺と循環器の中にある空気は、植物が色鮮やかな花や葉を織り上げるのを助ける。雲と共に空気が雨をもたらしている間、それはまた、1つの花から別の花まで花粉を運ぶ。その微力な肩に、何トンもの水を載せて運ぶ。飛行機のように。そして光を広げ、熱を送り、私たちの耳へ全ての音を届け、私たちの鼻に多くの種類のおおいを運ぶ。これまで、間違いがあったことはない。



温暖な気候においては、空気のその軽やかさと優しい風は、私たちに、精妙で深い意味を私たちの心にもたらす。時にはそれは、そこにある全てを破壊する嵐、ブリザード、竜巻という形となり、神のなさったことを理解せず、感謝しない人々への警告となる。そういった出来事に遭うと、人々は自分の弱さを理解し、彼らの創造主に庇護を求める。宇宙という書を慎重に読み、熟考する人々は、特に空気のページにおいても、そこに留意すべき真実があり、あるいは警告がある、と読み取ることができる。



## 驚くべきフィルター

対流圏は大気圏の最初の層であり、極の部分では 8 キロの厚さ、赤道の部分では 17 キロの熱さを持つ。その次にあるのが、成層圏である。その厚さはおよそ 50 キロであり、高い温度を持つ。この層は、太陽の高エネルギー放射線が地球に到達するのを防いでいる。地球上の生命に欠かせない存在であるオゾン層は、成層圏の中に位置している。太陽の危険な光線をフィルターにかけているオゾンは、3 個の酸素分子でできている化合物である。紫外線は、酸素と結合することによって、酸素分子をオゾンに変換する。

人間が製造した一部の化学製品は、オゾン層に害を及ぼし、その結果、紫外線が地球の表面に到達することが可能となった。それによってもたらされた結果の 1 つが、発ガン率の異常な増加である。高エネルギー紫外線は、非常に短い波長を持ち、それによって DNA の結合を破壊する。またこれは地球に達することによって、地球の大気を加熱する。10 度の気温上昇は、血液や体液の沸騰を引き起こすのに十分である。

これによって、私たちはこの非常に微妙なバランスの維持におけるオゾン層の役割を理解することができる。この完全さが、偶然のものだと主張する人々は、神が被造物に送られるメッセージを読み取ることができないのだ。

## 比較

これらの恵みに感謝するために、月について考えてみよう。:そこでは昼の温度は 120 度に達し、夜の温度はマイナス 150 度にいたる。絶えず、流星群と紫外線によって傷つけられている、荒涼として、静かな死の土地である。これは地球で起こらない。なぜなら、大気中の二酸化炭素と水の分子が太陽の過剰放射を吸収するのだ。これは昼の間、温度上昇を制限して、夜のために熱を保存する。これによって、私たちの惑星では温度が快適に保たれているのだ。他の惑星では温度の極端な変化が生じているにもかかわらず。



海水は、地球の表面の 70 パーセントを覆っている。これは地球の気候を調整する。凍てつく寒さの北極・南極の気候や、熱帯の灼熱の気候から陸を保護する。陸は、太陽から放射で吸収していたエネルギーを容易に放射することができ、その結果、適度な気候を確保するのだ。

海は、より高い放射率にさらされているが、その温度は上昇しにくい。何百万もの太陽エネルギーが、水の温度をほんの 1 度か 2 度上昇させるのに必要となる。またこの水は容易には冷えない。温度の変化に対するこの抵抗性が、気候を調節し、またその蒸発によって、陸への水の供給が可能となる。陸に対する海の比率が低かったとしたら、地球は砂漠で覆われていたことだろう。ここに、限りない英知で宇宙を創造されたお方のプランを見出すことはできないだろうか？

## 流星

次の層、中間圏は、その上の 80 キロの部分に広がっている。この層は、地球を、流星群から守っている。地球の引力がそれらを引き付けるために毎日多くの流星が地球に降るので、これは欠かせないものである。それらは大気圏に入ると、姿を消す。なぜなら、その速度と大気圏の空気との組み合わせがそれらを地理にってしまうからである。このシールドがなければ、私たちは毎日、ちょうど月への冒険に出かけた宇宙飛行士のように、流星に直面していただろう。そして、このちりは、水の粒子と一体化することによって、雲を形成する。物理的、数学的に割り出されているある密度に到達すると、恵みの雨となって地に落ちてくるのだ。

### 電磁波のための鏡：

私たちは電離層に来た。電離層は次の 400 キロに広がっている。

無線のラジオが発明されたとき、人々は驚いた。しかし、科学者は大きな問題を見つけた。電磁波がまっすぐ伝わるものであり、また地球は球状であるので、それらは 100 キロしか進むことはできなかった。しかし、電離層の中の粒子にはそれらの電磁波を反射する電荷があるため、1901 年、イギリスとカナダは、反射されて地球に戻ってきた電波を利用し、大西洋をはさんで交信することに成功した。電離層は宇宙の巨大な反響室のようである。

このように、私たちは、神が地球を創造された時、全ての世紀の必要性をも考慮に入れられたというところを見出すことができる。

### 磁気シールド

次に、外気圏がある。外気圏は次の 2000 キロから 3000 キロの地点に広がる。ここでは、空気との摩擦がほとんどない。分子の衝突も徐々に衰え、温度の相対的な意味がもはや適用されない。従ってほとんどの人工衛星が、この層にその軌道を置く。

コンパスは磁場線によって常に地球の北を指す。この指示に従うならば、私たちは北極に着く。こういった知識は、私たちが陸、海、および空中で容易に方角を見出すことを可能にする。

極地は、赤道を形成している仮定的円の中央から通る、仮定的軸の両側に位置する。しかしそれは地学的な意味での極地であり、磁気的な意味での極地ではない。磁気上の北極は、カナダ北西部の Ellef Ringes 島の近くに位置している。これは地理的な北極の 1290 キロ南である。磁気上の南極は、南極大陸の Adelie Land に位置している。磁場を引き起こすことに関しては様々な説明が試みられてきたが、結論には至っていない。1つの理論として、磁場線（ヴァン・アレン帯）が、地球の中心の高温で解けている鉄とニッケルのため、地球を囲んでいるためと主張されている。

最も大きく、そして最後の層であるこの層は、磁気シールドとして機能している。磁気圏は磁気の密度によって形成された帯からなる。地球に最も近い場所にあるベルトは、地表から 4000 キロの所に位置する。2 番目のベルトは 1 万 6000 キロのところであり、最大 3 万キロメートル離れたところにまで影響を及ぼすことができる。これらの目に見えないベルトは、それらの向きを変えることにより、危険な宇宙線や荷電粒子をとらえ、それらが下の層に入るのを防ぐ。それによって、これらの宇宙線（いくつかの原子爆弾に等しい威力を持つ）や太陽風は地球に到達することがない。

大気の特徴がまだ何一つ解明されていない頃に、地球と空の主は、大気が盾としての役割を果たしていることを私たちに教えられている。「更にわれは、天を屋根とし守護した。それでもかれらは、これらの印から背き去る。」（預言者章第 32 節）

### 大気中のバランス

大気中の気体は、その性質のため、重力がそれらを引き下げて、それらを保存しようとする際、空間に散らそうとする。しかし完全なバランスが、そのどちらの変化をも起こさせない。地球の質量、動径、および重力、そしてその他のいくつかの要素を用いて行なわれる緻密な計算、厳密な調整は、人間の想像力の範囲を超えている。もし、地球が太陽のより近くにあったとしたら、空気はより熱され、その熱い空気は上昇していつてしまっただろう。地球が太陽からもっと遠いところにあったとしたら、空気は地表に引き下げられていただろう。または、重力が現在の状態よりもう少し大きいか、小さいかしていれば、同じような状況が起こっていただろう。もう少し重力がそうなら、現行価値より少なく、同じ状況は起こるでしょうに。さらに、入ってきた熱がしばらくそこで保たれていたに違いない。これは二酸化炭素によってもたらされる状況である。

そして、私たちの惑星は暖かく、明かりの灯された家のように、冷たく暗い宇宙を高速で移動しているのだ。この家では、私たちは必要とする全てのものを持っている。私たちが何を持っているかを理解するためには、月と比較してみればよい。

こういった措置が、何も知らない自然界や知性を持たない自然の摂理によって行なわれている、と主張する人は、無機質で意識を持たない全ての粒子が、宇宙をどう創造するかという知識を備えていて、被造物、特に人間の、あらゆる器官の全ての需要を満たし、それらの過程を永遠に、すべてにおいて完全に機能させる絶対的な力を持つ、と仮定しなければいけない、ということを知っているだろうか？



江住 よしえ

先日衣替えをしました。私は洋服、バック、靴、アクセサリなどが好きなので私の家にはたくさんあります。でもそんな大量の「もの」を見て自分でも時々うんざりすることがあります。衣替えの度にたくさんの洋服を洗濯し、またバックや靴を磨き大変な思いをします。10代の頃は今よりもっとファッションに興味があったので、今はとても買わないような高い服やバックなどを買っていました。私の洋服、バック、靴、アクセサリがたくさんあるのは買い物を頻繁にするからというよりも、もらったものや、思いでが詰まっていた捨てられずに何年も使っているものがほとんどです。さすがに今はブランドものの高いものが欲しいとは思わなくなりましたがバーゲンで何かを見つけると、やはり手がでてしまいます。

家の中を見回してみるととてもたくさんの「もの」があるのに気づきます。掃除をする際にもそれらのものを動かして掃除機をかけたり拭き掃除をしたり、またそれらの「もの」を磨いたり掃除だけでも一時間はあつという間に過ぎてしまいます。私は汚れているものや散らかっているものを見ると掃除をしたくなる方なので時間があれば無意識に掃除を始めている事があります。でももしこれらのものがなかったらそんな時間を違う事に使えるな・・・と時々思うのです。

朝は目覚まし時計の音で目を覚まし、ベッドを片付け、テレビのニュースを見ながら食事を済ませた後には台所の掃除、洗濯、家の中の掃除、常に「もの」に囲まれています。

もちろんそれらは「今」の生活に必要なものですが、私達は本当に多くの「もの」と生活しているなと思います。

私は旅行に行く際にも、実家に帰る際にもたくさんの荷物をもって行きます。女性なのだから多少荷物が多くてもいいとは思いますが、それでもどうしてこんなに荷物があるのかと思う時があります。海外からの帰りには必ずバックが1つや2つ増えているのです。

そんな「もの」の生活に慣れてしまって、考える事や大切な時間、そして「もの」よりも大切な事を見逃しているのではないかと思う事があります。ある学者は「常に自分をこの世での旅人と捉えることができたら、現世的な良さを持つものに引っかかってよめいたりすることはなかっただろう」と言っています。本当に人間は目の前にあるものに執着してしまいがちで、そして目に見えないものに関しては認識することが難しいという性質です。私達がこの世で共に過ごしているこれらの「もの」は何ひとつとしてあの世に持っていくことはできません。そう考えると、これらすべてのものがとても意味のないものに見えてきます。これらの「もの」に執着せずに、そして付き合い過ぎずにシンプルに生活して、もっと意味のあることに時間を割きたいものです。手始めに私はなるべくものをこれ以上増やさないように心掛けています。



『八十日間世界一周』 Around the World in 80 Days

「唯 行かんが為に行かんとするものこそ、真個の旅人なれ。

心は気球の如くに軽く、身は悪運の手より逃れ得ず、如何なる故とも知らずして

常に唯、行かん哉、行かん哉 と叫ぶ」

これは私の大好きな詩で、ボードレールの「旅」という作品です。「旅」ほどロマンのある言葉は無いように思います。「旅行に行つて来ます」はレジャー性が強いのに対して「旅」は「旅に出る」といった感じで、もう二度と戻つてこないんじゃないかというような無目的な放浪感もあり、大変素敵な言葉だと思います。

何故私がそんなに旅にロマンを覚えてしまうのかというと、一つには小さい頃から読んだ色々な本の影響があると思います。遺跡の発掘物語や探検記を読むのが好きで、将来は探検家になろうと思っていたほどでした。フィクションでも冒険ものやSFが好きで、その中でも好んで読んだのがジュール・ヴェルヌの作品、特に『八十日間世界一周』でした。今回御紹介するのはその映画版です。

---

英国がインドを統治し大陸鉄道を敷いていたビクトリア朝時代、ロンドンでは几帳面で時間に厳しい典型的な英国紳士のフォッグ氏が社交クラブで仲間とどのくらいで世界を一周できるのかを話し始め、フォッグ氏は自分なら80日間で十分だ、もし出来なかつたら全財産を放棄しよう、という無謀な賭けに出る。しかも、早速旅に出るという。その日に雇われたばかりの使用人、パスパルトゥはわけもわからぬままついて行く羽目になった。気球、列車、船を駆使して世界一周に乗り出す彼らだが、途中、インドに立ち寄った際に夫の葬儀で殉死させられようとしていた女性、アウダを助け、共に旅を続ける事となる。更に、ある勘違いから逃亡中の銀行強盗と間違えられ、警察から追われることになってしまう。警察の策略にはまったり、トラブルがあつたりと伸びていってしまう旅程…果たしてフォッグ氏は80日間で世界を一周することが出来るのだろうか…。

---

この話の舞台となった当時を考えると、旅はお金持ちだけの出来る特権的なものであったことでしょう。しかし、私には色々な所に行って色々なところを見、色々な事をして次の土地へと、ただただ期限内に移動しきる事を目的として旅していくというのがとても面白く、素敵な事に思えました。後から思えば、ボードレー流「真個の旅人」ではあれ、どこでも「イギリス流」を貫くフォッグ氏は帝国主義もはなはだしく、鼻持ちならない人間であったかもしれませ

ん。更に、土地の風習を無視して夫のために殉死するはずの女性を助け出すなど、それでいいのかとも思うのですが、これも作品の書かれた当時は英雄的行為であったわけですし、話の山場の一つでもありますし、アウダも殉死を無理強いされていた、というところでうまくまとまっているように思います。そういった微妙な「世界観」の問題をはらみつつも、ハリウッド黄金時代に作られた映画なので様々な名優が隠れています。それを探す楽しみも含めて、ハリウッドなりの「世界観」を改めて見るのも面白いかと思います(ここでは「日本」はかなり奇妙な場所のようです)。もちろん、そんな事を考えなくとも、原作に忠実で、華やかで、わくわくする面白い作品であるので楽しめると思います(ちょっと作品の時間が長いのですが…)

私としては、賭けで 80 日で世界一周するよりも、のんびり色々なところを見ながらちょっとずついろいろな国に立ち寄りたいたい気がします。実際に私も目的も無くふらふらと色々なところに行くのが好きで、計画的な旅行よりも自分の調子や興味、現地の状況、人との関係などでふらふらと漂っていくのが性に合っていたようです。もちろん、日本国内でも見たいもの、行きたいところを起点としてふらふらとしていた事もあるのですが、小さい頃から外国の遺跡が好きだった身としてはやはり外国に行っているいろいろなモノや人の暮らしぶりが見たい! という気持ちのほうが強かったように思います。

で、外国へ「旅」に出た事が何度かあります。そこでは「やっぱり来てよかった」と思うことが不安や苛立ち、不満に比べてはるかに多く、かなり楽しく過ごすことが出来ました。もちろん、旅の途上では嫌なこともたくさんありました。認識や常識の違いでもめたり、お金でトラブルになったり…。幸い、私も「悪運の手から逃れ得」なようで、毎回五体満足、精神的にも充実して戻ってくる事が出来ました。

旅には何かとトラブルがつきものですが、日常生活でも実はそうです。旅で培ったトラブルに対処するチカラ、応用力、親切心、忍耐力、精神力を日常でも活かしていくことが出来るのかもしれませんが。なかなか旅に出る事も出来なくなった今日この頃、常に「行かん哉」と叫ぶ私の心を「どこにも行かなくても、日常を旅と思って過ごせばいいじゃない」と、なだめる日々がつづいています。

---

『八十日間世界一周』 1956年 アメリカ 182分

監督:マイケル・アンダーソン

出演:デビッド・ニーブン(フォッグ)/カンティンフラス(バスパルトウ)/シャーリー・マクレーン(アウダ)/ロバート・ニュートン(フィックス)/

その他、シャルル・ボワイエ、マレーネ・デイトリッヒ、バスター・キートン、フランク・シナトラなど



「言葉は汗と同じ、一度出たら戻らない」と言った言葉を随分前に目にしたことが

あります。そのときは、当たり前のことを言っているなど、あまり気に留めていませんでしたが、最近では話すときは言葉に注意しようと思うようになりました。汚い言葉やネガティブな言葉は、発した人をその言葉の通りにする力があるように思います。

「言霊」と言われるものですね。私は自分の発した悪い言葉がブーメランのように戻って来て、戻ってきた言葉に打ちのめされた経験があります。逆に言葉の選び方で得をしたり、よい状況を招くこともありました。

4年ほど前のことです。トルコのイスタンブールで長期滞在を始める前に、友人と二人でトルコの東側を旅することになりました。まだ二人ともトルコ語を勉強する前なので、言葉の面で心配な部分もありましたが、何故かトルコでは悪いことを自分達にする人はいないと思っていました。

東側への旅行はアンテップの空港での待ち合わせから始まりました。友人はイスタンブールから、私は北キプロスからアンテップを目指しました。船は海が荒れていたために遅れていました。フェリーの着いた町からアンテップの空港までは、何度かミニバスを乗り継がなければなりません。私は待ち合わせに間に合うかととても不安でした。運転手のおじさんが私の不安な様子を察してか、また片言でいろいろ話そうとする外国人に興味を持ったのかは分かりませんが、「アンテップの空港まで行ってあげるよ。バスが止まる予定の場所は空港からかなり離れているから、悪いけど500円くらいは多くバス代を貰うよ。いい？」と申し出てくれました。私は嬉しくて何度も何度も感謝の言葉を言いました。そのうちに「泊まるころはあるの？家に来る？子供たくさんいるよ！」と申し出てくれましたが、旅の出だしで不安だったので丁重にお断りをして代わりに安くて、清潔なホテルを紹介してもらうことにしました。途中でおじさんは家により私に奥様手作りのパンとお菓子を持ってきてくれました。おじさんと私は空港で友人の到着を待ちました。友人はその日の最終便でやって来る予定でしたが、飛行機が遅れていて深夜の12時を回っていました。到着した友人は私が毛むくじらの大男を連れているのに驚いていたので、ことの経緯を話しました。友人は「犯されるとか思わなかったの！」と言われましたが、私はおじさんがきちんと体を清めてお祈りしている姿を見たので、大丈夫だと確信していました。

その後もウフファでハッジを済ませたオジサンに道を尋ねたことが、きっかけとなりおじさんの家に泊めてもらうことになり、奥さんから子供向けお祈りの方法本と、文字を押すとアラビア語を話す子供向けの勉強グッズを何故か私だけが頂いてしまいました。しかも、文字を押すとアラビア語を話すグッズ

の方は子供が「私のだからあげちゃだめー！」と騒いでいるにも関わらず、私に「いいからもって行きなさい。」と言うのでした。他の場所でもオレンジジュースを頼んだだけなのに、「これを持って行きなさい。」とイスラム教の教珠をくれようとするので、驚いていると「プレゼントだから。」と手に握らされました。サバサンドを食べた店でも、「これを見て、ここに写っているのは私の店だよ」と市販のポストカードを私に見せた後に「これプレゼントだよ。あげるよ。」と言われたこともあります。

このときも友人と一緒にいたのですが、貰ったのは私だけで何だか不思議でした。

その不思議は後からトルコ語を学ぶうちに判明して行きました。私が使っている言葉にトルコ語勉強している人たちの間で言われる「アッラー語」が多かったのです。日本にいる時も、トルコでのホームステイ先でも、私は敬虔なイスラム教徒に囲まれて過ごしていました。私の使う言葉にドイツ人のクラスメイトが反応して「ミホはイスラム教徒なの？ 仏教徒？ じゃあ、どうしてイスラム教の信仰が強い人のような言葉を使うの？」と言われて驚いてしまった。その後、先生がどちらもトルコ語で思想的な区別はありませんよ、といった内容を授業でしきりに解説していましたが、一般社会では区別があるみたいでした。もしかしたら、いろいろ親切にしてもらったり、突然プレゼントをされたりしたのは、この言葉の選び方が原因かもしれない、と思うようになりました。また親切にしてくれた人達やプレゼントをくれた人達は、きっと信仰が深い人でもあるのではと思いました。トルコを旅行して思うのは、いつも周りの人たちが、私が何を話しているのかに非常に興味津々に聞き耳を立てているということです。（これはトルコに行ったことのある人がみんな経験することだと思いますが）きっと私が会話の中で用いているトルコ語も聞いていたのでしょう。お陰で、恐ろしい目に遭うこともなく出会いに恵まれた旅をすることが出来ました。同じ意味の言葉があって、たまたまアッラー語の方を選択する環境にあったというのはよいことだと思います。少し前に「選ぶという行為には愛がある。」という言葉を見ました。選択肢の中から選ばれた物事には、無意識に愛が働いて選択をさせている、という主旨の言葉でしたが、その通りだと思いました。

この旅の過程で、私が無意識に選択して使っていた言葉は、私のお守りとなっていたのでした。







ある時、おじいさんと幼い孫息子が、ケンタッキー州東部の農園に住んでいました。

毎朝、おじいさんは早起きをしてキッチンのテーブルでクルアーンを読みました。おじいさんの孫息子は、おじいさんのようになりたくて、出来る限りおじいさんのまねをしました。ある日、男の子はおじいさんに尋ねました。

「おじいちゃん、ぼくね、クルアーンをおじいちゃんみたいに読もうとしたけど、分からなくて、本を閉じたら全部すぐに忘れて、クルアーンを読むことは何に良いの？」

ストーブに炭を入れている所から、おじいさんは静かに振り返り答えました。

「この炭用のカゴを持って川へ行行って、カゴいっぱいの水を持ってきてくれないかい？」

男の子は言われたとおりのことをしました。しかし、すべての水は家に着く前に漏れてしまいました。おじいさんは笑いながら、

「次はもう少し早く動かなくちゃいけないな」と言ってもう一度カゴを持って川へ行行って試させました。今度は男の子ももっと早く走りましたが、家に戻る前にカゴは空っぽになってしまいました。男の子は息を切らしながらおじいさんに、

「カゴでは無理だよ」と言っていて、代わりにバケツを取りに行きました。するとおじいさんは、

「バケツいっぱいの水は欲しくないのだよ、カゴいっぱいの水が欲しいのだよ。君はまだ頑張りが足りないだけだよ」そう言っていてドアの外に出て男の子がまた挑戦するのを見ました。このとき、男の子はこれが不可能だと思いました、でも、もし男の子が出来る限り早く走ったとしても、その水は家に戻る前に漏れてしまうことをおじいさんに見せたかったのです。男の子は川の中にカゴを投して、そして一生懸命走り出しました。しかし、おじいさんの所に到着した時には、また空っぽになっていました。

「ねえ、おじいちゃん、無駄だよ！」と息を切らしながら言いました。

「無駄だとそう思うのかい？」おじいさんは言いました。

「カゴを見てごらん」そう言われてカゴを見て男の子は初めて違いに気がつきました。そのカゴは、汚れた古い炭のカゴから、今では中も外も綺麗に変わっていました。

「クルアーンを読むと起こることはこれだよ。読んだ時、君は分からなかったり全部を覚えてないかも知れないけど、君は内側も外側も変わるんだよ。それが全能者アッラーフの業なんだよ」



アルハムドリッター、4年です！

この「やすらぎ 人と人をつなぐ月刊総合誌」も、この7月でまるまる4周年となり、8月からは5年目ですね。まずは読者の皆さま、ありがとうございます！そして、編集部の方々、お疲れさまです、おめでとうございます！感謝の気持ちを込めて、この機会に、個人的にこの「やすらぎ」との4年を振り返ってみることにします。

4年前って、私、何してた？思い起こしてみます。2002年8月。そうです、結婚1周年です。恐ろしく前の時間のように感じられます。大学はまだ実質2回生。ひゃあ！としか言いようがない感覚です。

そんな、ほやほやしていたある日のこと。何月だったかは忘れまして。編集部の方から、私のお料理に関するエッセイを「やすらぎ」に載せても良いか、とのお話がきました。

私の答えは「イヤです。」なんと！素っ気無い！

その文章に対して、雑誌に載せて良いと思える自信が全く持てなかったからです。「イヤ」だけでは素っ気がなさすぎるので、「代わりにエッセイを書きます」と、案外安請け合い。それが全ての始まりでした。

最初は、自分が（ここがポイントですよ、皆さん、「やすらぎ」が、ではなく自分が、ですよ）、4年も続くなどとは夢にも現にも思わなかったのが、非常に気楽な感じで「代わりに書きます」と言った手前、何とか文章を仕上げました。

その、最初のエッセイが、創刊号の8月号だったか、9月号だったかは記憶が定かではありません。確か9月号だったと思います。とにかく10月号ではないことは確かです。10月号には、『24時間絶食の思い出』というエッセイを載せていただきましたが、この文章中で「今回は…」と、いかにも、前にも書いた調子で書いてあるからです。ともかくもそうして、「書く」ことが始まったのでした。

「やすらぎ」アーカイブをみる限り、最初の頃私は、書いたり書かなかつたり月々でした。しかし、2003年7月号では、一つの転機が訪れます。『ヒジャーブとバリアとスティグマ』という、自分にとっての「ヒジャーブ4部作」の始まりである作品を書いたのです。1作目では、ヒジャーブ着用に関する悩みと、その悩みに関する自分なりの見解を述べたのですが、4部作の最後、『ヒジャーブその後』では、ヒジャーブを大学でも着けるようになったことを書きました。つまり、それら一連の作品と同様に、私の実生活においても、ヒジャーブということに関して自分の心の変化を体験したのです。

そしてこの作品群は、初めて読者の方からご感想を頂いたことでも、自分にとって記念碑的なものとなりました。

さらに、ヒジャーブに関して、大学で以前から相談に乗って下さっていた先生のご厚意により、その先生の受け持ちの講義にお邪魔して、ミニ講演をすることになりました。その講義のためのレジメにも引用され、多くの受講生に配られたのも、このヒジャーブ4部作でした。

書くことは、ただ紙に字を埋めるということではなくて、表現すること、そして表現することでこんなに嬉しいことがある、と初めて思いました。

私はもともと、書くことが苦手なほうでした。今もその意識は変わりませんが、そしてうまく言えませんが、「やすらぎ」で書く経験を多くさせていただいたことで、書くことに対する考え方、「思い」のよなもの、少しずつ変化してきたように思います。

また休み休みの時期が過ぎ、2004年8月、『カレッジの小石～小さな私の、オクスフォード旅行記』の連載を始めました。「つづく」ものを書いたのは、これが初めてでした。途中、読書案内エッセイやお休みをはさみ、2005年11月、全11回で終了しました。これは、オクスフォード旅行記であるにも関わらず、オクスフォードに着くまでが長く、「7」の時点でやっと、ヒースロー空港に到着したところを書いたという、変わった代物になったのですが、「毎回楽しみにしています」などの、うれしいご感想をいただきました。

旅行記を書いている間に、私は大学を卒業し、働き始めました。今年の4月、大学院に行き始めるまでは、途中『入院記』をはさみ、『～2作』という読書案内エッセイのシリーズを書きました。これはそれ以前でも単発で書いていた経験から、こういうシリーズも楽しく書けそうだと思ったことがきっかけでした。

今では、書くことは「発信する」こと。とりあえず表現してみる、から、発信する、伝えるへと、意識が変わってきました。『～2作』シリーズは、まさしく発信の感覚で書きました。

やすらぎに書かせていただいたエッセイの一部は、そのまま「思い出」でもあります。こうして振り返ってみれば、その要素は濃いですね。『入院記』などは、まさにそうです。また、ヒジャーブ4部作の背景には、教育実習があります。教育実習そのものに関してはあまり詳しく書きませんでした。この時期の心理的变化に、非常に大きな影響のあったできごとでした。そういう意味でも思い出です。そして、本業である、障害児教育に関するものも、ちらほらと書いてきました。

時に孤独で、時にアイデアが湧かず、「煮詰まった～」とか、「書けへ～ん！」などと叫びながら、時に締め切りに追まわられていると感じながら、何とか(断続的でも)続いた4年。たった1本のエッセイを書くだけでも、4年と思うと「おお…」と感慨深いのに、多くの記事を束ねていらっしやってきた編集部の方々には、さぞご苦労されたことと思います。そのご苦労のうち、私がギリギリになったり、遅れたりしてご迷惑をおかけした部分は、大変申し訳なかったと反省しております…

全くえらそうなことは言えませんが、この4年で、ほんの少しだけ、書くことの大変さを体験したので、「読む」ことも少し変わったように思います。以前私は、何も考えず、作品の書き方などについて、自分の思う枠組みに合わなかったりすると、書き手に対して批判的に思ったりしていましたが、本当に少しだけ、書き手が「書いていた時」をふっと想像できたり、ここはこう思っただけで書いたのではないかなど、背景に思いを馳せることができるようになりました。

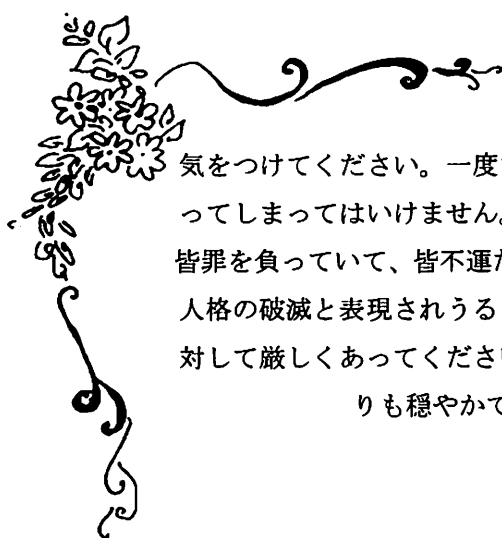
やすらぎにエッセイを書くことで得た、体験、「書く」感覚、「読む」感覚、そして読者の皆さまからのご感想は、私の財産です。今まで、書かせていただけて、本当に良かったです。アルハムドリッラー。感謝の気持ちでいっぱいです。

これは別のところに投稿した時のお話ですが、前編を書いて、後編をすぐ次の号に書く予定が、延び延びになってしまい、一月あけてしまいました。その時、「たくさん読むところがあるんだから、私のところなんて読まれないよ。」と夫に言っていました。「そんなことはないよ、続きが気になります、なんて言われたらどうする？」と夫。そうすると、その、穴をあけてしまった号に、私の前編に対する、読者の方からのご感想が！「この記事に興味深く読みました。続きが気になります」…「ああ！やってしまった！」と大変後悔し、その次の号に間に合うよう、後編を仕上げました。

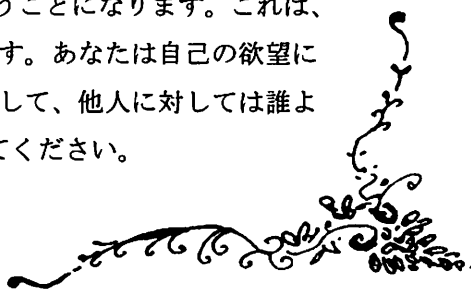
読者の皆さまのおかげで、こうして書き続けられます。本当にありがとうございます。

これからも、どうぞよろしくお祈りしますね。

樋口 ともえ より



気をつけてください。一度たりとも自己の欲望の仲裁人になってしまっははいけません。そうすると、あなた以外の人は皆罪を負っていて、皆不運だということになります。これは、人格の破滅と表現されるものです。あなたは自己の欲望に対して厳しくあってください。そして、他人に対しては誰よりも穏やかであってください。



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三井住友銀行 店番号：005（春日部） 口座番号：7315959 口座名義：Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> [info@yasuragiweb.com](mailto:info@yasuragiweb.com) [yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部